&&&&&&&&&&&&&&

中国革命とそれに続くもの

ペン・ムウト

&&&&&&&&&&&&&&

中国共産党はどうしてこのようなことを述べるのか。――党員の中には、ブルジョア的な政治傾向を持つものもいれば、プロレタリア的な思考を示すものもいる。この〝資本主義的な指導者〟の経済的状況が、資本主義社会におけるブルジョアの経済的状況と異なるものであり、かつてもそうであったとするならば、これに対してマルクス主義者はこう考えるであろう。――資本主義的政策は前衛党内部にも展開され得るか？　このような状況の中で、プロレタリアートの代表は、階級闘争の中でどのようにして優位に立つことができるだろうか。なにゆえにこれらの人々は（資本主義的政策の中心であるという）偏見を持たれるのか。

マルクス・レーニン主義者は、共産党がその強固な中央集権体制――管理体制の面だけではなく、政治方針においても――によって前衛党たり得るということに対して、何ら疑問をいだいていない。すべての党員は全く同じ政治方針のもとにある。それは丁度、革命がたった一人の適切な指導のもとになされるのと同じである。前衛党の中に政治的中央集権化がなければ、革命は成功するものではない。しかしながら、党員の中の資本主義的傾向は、一九四九年の中国革命以前にも存在していたのであった。それはこう説明されよう。もし、四九年の革命が首尾よく遂行されたと言うならば、中国共産党は、中国革命が中共の指導のもとで行なわれたその時点で、すでに中央集権化されていたと考えられる。中国共産党の政治方針はどのようなものであったのか？（資本主義的傾向へと展開され得る政治方針）。

プロレタリアは人民である。

党とは何か？

ブルジョア構造

資本主義社会においては、大企業の多くは賃金体系だけではなく作業現場の面からも、労働者を多くの等級に分断することを進めている。それは〝ブルジョア構造〟と呼ばれるものである。

ソビエト共産党や中国共産党においても、この種の構造が見うけられる。ソ共や中共の内部においても、最大の権力者というものはこの構造でいう人民大衆から最も離れた所に存在するものである。しかし、その権力者は前衛党における前衛なのである。資本主義社会においては、この種の構造は非常に有効であり得る。なぜなら、企業目的というものはだれにも明白である。すなわち、企業管理のもとでより多くの利潤を追求することであるから。この種の企業においては、社長の権限は生産の決定を行なうにすぎないが、共産党においては、指導者は人民大衆の将来に対する決定を行なわなければならない。そしてブルジョアジーが階級によって大衆から距離を保っているように、党の指導者も人民から遠のいてしまっている。このような状況のもとでは、そこには指導者からの一方的な命令しか見ることができない。（党内の）大衆の意見というものは、いつも中央集権化を要求するものだけである。もし革命というものが、資本主義下で企業の行なってきたような生産の増大だけを意味するものならば、この種の党というものは非常に有効な力を発揮するであろう。しかしながら、私たちは生産の増大と真の社会主義革命とのあいだに何らの共通面を見い出すものではない。もし、労働者の自主管理がなければ、労働者自身の仕事の決定への参加がなければ、労働量の分担の他はすべて党の代表者によって決定されてしまうだろう。〝大躍進〟〝人民公社〟の標語は疑う余地もなく無駄なものであった。いったいどのようにして、この種の革命的な生産様式は、〝ブルジョア構造〟の指導のもとで成功をおさめ得るのだろうか。もちろん、不可である。

資本主義的発展

毛沢東のロマン的な革命の実験が失敗した後、党内の実務派指導者が主導権を握った。党の絶対的な管理のもとで、全くいままでと同じように、資本主義的政策が受け入れられた。

一九五九年から六五年にかけて、実務派は一九五八年の失敗に対して修正を行ない、資本主義的な方法に基づいて経済の発展をはかった。給与体系の改善、個人的所有の部分的容認、人民間の小取引、等々。資本主義の主な形態があらわれ始めた。人民は労働者であったし、党は管理者であった。そして、余剰価値は党の管理のもとになった。新しい資本家階級が実際に誕生した。そして同時に、不満の徴候があらわれ始めた。毛沢東は、長年党内野党的な立場にあまんじていたが、官僚に対する人民大衆の不満につのる心をたくみに用いて、自己の政策を実行するための一派を確立し、権力を手にする機会を得たのであった。彼は大衆を動員し、〝文化大革命〟を起こした。

文化大革命の中で、人民は樹立されつつある政府を引き継ぐことによって、官僚政治の罪悪を一掃する機会を得た。官僚主義に対決する真の運動があらわれ、人民は官僚政治の構造を根底から打ちこわすことを望んだ。紅衛兵は最左翼に転じ、彼らは隠健派紅衛兵や軍隊と勇敢に戦った。しかし、この真の革命は最終的には、実務派官僚と毛派の共同戦線によって抑圧されてしまった。数十万の人民が虐殺され、投獄された。

この革命を通じて、毛沢東は大衆運動という

ものは、だれによっても管理され得るものではないということを学んだ。そして人民も学んだ。官僚と人民間に闘争が生じた場合は、官僚は、官僚相互間の反駁を捨てて、官僚同志の共通の利益へ向けて結集し、人民の抑圧を行なうものである、と。

軍が抑圧に加担し、革命は死んだ。

資本主義が中国において、発展しつづけた。

第三世界

この二〇年のあいだに、発展途上諸国の独立闘争は、世界に対して強い影響力を持つようになってきた。ベトナム戦争はアメリカに反戦運動をもたらしたし、日本における反安保闘争、フランスの五月革命等々。六〇年代における運動のあらゆる面が、ベトナム戦争と結びつけて考えられる。

しかしながら、ひとたび中共やソ共に類似した共産党が権力を握ってしまうと、ほとんどの闘争は終結を迎えてしまう。私たちはまだ第三世界において、いかなる真の社会主義革命を見い出し得ない。そして私たちは、インドシナ闘争においても、反官僚主義的な組織を見い出していない。なぜか？

発展途上諸国において、大衆はイデオロギー的には先進諸国の大衆と同じというわけではない。彼らはまだブルジョア民主主義を経験していない。しかし彼らは帝国主義者と闘っており、もし彼らが本当に資本主義者・帝国主義者の管理からのがれようと欲するならば、彼らは侵略側の国の手段とは異なる政治的手段を取るよう強いられている。このような状況のもとでは、ロシアや中国で起こったように、強力な指導者が大衆の力をつかむことは容易にありうる。しかし、発展途上国において、真の社会主義革命の起こる可能性は全くないのであろうか。否！革命は、大衆の意識に基づくということを私たちは信じている。そしてまた、闘争を通じて真の意識がめざめるということも確信している。反帝闘争は、この種の闘争の一例である。もちろん第三世界に反権威主義的な文化を築き上げることはたやすいことではない。同時にまた私たちは、いかなる真の反権威主義的な革命を先進諸国に見ることもできない。第三世界はいま、闘争のまっただなかにある。

闘争のあるところどこにでも、私たちは革命のチャンスが得られる。（編集部・訳）

〈編集部付記〉本稿の筆者は、香港の新左派の若い活動家である。香港の新左翼運動については、本誌でも紹介したことがある（五号「香港・七〇年代戦線」ユー・ハン談）。彼らの立場は、きわめて複雑な政治情勢のもとに置かれており、その主張や思想的見解を正しく理解することは容易でない。その理由は、一つには明らかに互いが置かれている情況の違いについての認識不足である。また、思想的な表現方法の違いがある。しかし、これらの原因が彼らとの知的な、あるいは活動面での交流を妨げることにはならない。必要に応じて、それらは克服されるだろう。

本誌では、中国革命の捉え方といった主題をもって、彼らとの意見の交換を図りたいと思っている。この主題に関する日本の知的状況は、ある種の偏見に満ちていた。それは中国革命の冷静な認識と多様なアプローチを排除するものであった。本稿は、一部理解しにくいところもあるが、中国革命論への第一歩にしたいと思い掲載した。

男と女の開かれた関係（二）

秋山　清

二　家について

戦争が終ってから三十年すぎた。非常に大きな変化があったと思われもするし、その実績も多少はある中に、変化の形態ほどには実質が伴わないことがずいぶん多い。その第一は「デモクラシー」そのものである。日本の政治経済の上にデモクラシーの形式は大きく行きわたりはしたが、実質はあまり変わらない、ということを、誰しも実感しているが、その理由としては、大きく二つある。一つはデモクラシーそのものの実態がこれだけのものではないかということ、もう一つは絶対命令の占領軍によって課せられたデモクラシーは、政治や経済と日常生活にまでふかく底入れされたかに見えたが、その実は例えば「天皇」の存在そのものまでが一応デモクラシーに塗りかえられながら、かえってデモクラチックに補強されたところが大きくある。その他の至るところ、何ごとにもこのような現象が起っているとすれば、戦後の変革は巧みな換骨脱胎でのみあって、天皇国家の旧日本支配の権力が、デモクラシー日本の、そのまま支配者に衣更えしたに過ぎないのではないか、という懸念を忘れることが出来ない。具体的な例を挙げれば、たとえば「天皇在位五十年」の祝賀というのは、戦後日本においては全くのナンセンスでしかない筈であるのに、政府、官庁、学校その他が休みとなり、まるで神聖なる天皇の戦前と区別がなかった。戦前戦中の天皇在位二十年とその戦後の三十年とにいささかの断絶もないかの如くに、国家と政府と官僚とその他もろもろが心を併せて誇示する姿であった。

このような日本に於て、男と女の関係の、戦前における閉された関係が、戦後三十年の間にどの位まで開かれたか、開かれたという実態は如何なるものか、これを両面から探って見ることはまず今日の急務であろう。両面とは、その一つは「開かれた」という方から、もう一つは「閉されたまま」という角度から、の検討である。

たしかに一応大きな変化があった、ということは認められねばならない。たとえば男と女が手をつないで街を歩くということは以前にはなかった。交番の巡査などからそれはイチャモンつけられるべきものであっ

た。今そんなことはない。以前は手をつないで街を歩けばワイセツな（あるいはワイセツに類する）行為として咎められ、世間もそれを不思議がらなかった。夕暮どきなどに男と女が仲よく語り合って神宮外苑などを歩いて居れば、ワイセツ行為の現場を抑えたかの如くに交番に呼び込み、いじましい目つきで、道徳的ならざる行為者の如くに扱った上、今後に非行のないことを誓わせて、彼らは得意になったであろう。これは今日から思えば考えようのない程おかしくてみじめなことだが、いわばこれは愛する自由がなかったということである。愛は開かれるべきものとして存在してはならなかったのである。「人間」にとってこれ以上の不自由はない。自由ということについての反省のなかに、これは歴史とともに忘却しがたい反省でなければならない。

明治維新とともに欧米諸国の文物と制度をとり入れて近代国家へといそいだ日本の指導者は、この点に関してのみは先進国の自由よりも、惇厚なる日本の習慣を重しと見て、これを受け入れなかったのである。敗戦の時、占領軍は日本の対外征覇の思想のよりどころの一つを、日本人の封建性（あるいは武士道的奴隷的思想）に由来するものとして、これが滅亡のために、自由の許容を敢えてし、極端に性の自由にまで変革を及ぼさんとしたのであったが、それの三十年後の効果は、十分開かれた関係というまでに到達し得たか。開かれたという見方も部分的には成立つが、閉されたまま、開かれ得ないものだという理解もまた間ちがってはいない。

それを何故かと問う前に、日本の男と女の関係は、何故に近代国家として明治・大正の六十年を進んで来た文明開化の中に、それのみが暗く固定したままだったのか、をまず考えなければならない。暗く固定して来た理由が、昭和五十年代にもなお蟠踞しているとすれば、それは急には開かれた関係とはならぬだろう、と思われるからである。

現在にまで、もっとも男と女の関係を暗くし、繁雑にしているものは「家」の存在であろう。家とは、まず主人なる男が居り、主婦なる妻がいて、そこに若干の子供がいて構成される。その主人には上に辿って行けば父祖があり、その先祖があり、「家」の名によって重んずべく、従うべき家の掟というものもある。（他家から嫁いで来た主婦を通してその実家から外祖的な圧力もまたないではない）。ここで問題とすべきは、その「家」が男と女との関係における開かれた自由の強大な壁となっているという事実であり、その壁を強固ならしめる社会的現実というものがある。

戦前に比べて、結婚には当事者の意志による自由があるように今では考えられているが、それはむしろ例外に属する。そのような自由を購うためには、若者たちは多くの権利を放棄しなければならない。現在はその真只中にあるということである。だが何を放棄しなければならないというのであろうか。それは「自由」と「権利」とである。

一家の主人が死んだとき、彼の妻と子供たちは法規によってその財産を分けて相続することになっている。永らく長子相続であった日本の家のしきたりでは、この分割相続ということがスムースに行かない。「家」というものが壊れるからである。戦後新憲法では「家」の観念がそれ以前の日本のものとは根本的にちがって来ている。「家」とは一定の建物の中に一定の家族（主人を中心に家の子郎党が順位正しく格づけられて、

永世的に壊れざるかの如き血族組織）が居住して、それはその組織を拡大すれば一国家ともなるべき性格のものである。万世一系の天皇が、すべてその分家であるべき日本国民の家々の長としてその一族（臣民ども）をしろしめす、この形において、日本という国家が成立しているのだぞ、と強制されて来たのが太平洋戦争終結までの、日本国家の指導精神であった。上から下に天皇制として日本を支配した民族国家の形態がそれである。皇国（皇と国とが一つである）のため、ということは最も強烈な日本の精神であり、人間としての個の自由などというものはその前には何ものでもありはしなかったのである。国家の組織が家を包んでいる、だから家の中で家長たる父に叛くことは国家に叛くことである。家の中の父から長子に及ぶ権力体系は、それはそのまま国家の組織の細分化された部分であるとすれば、自由は国家に反抗し、天皇に不忠なる思考であり、主張である、ということであった。

「家」とは日本と日本人とにとって、そのようなものであった。明治に自然主義文学の主張が起ったとき、彼らはすぐ家の問題に衝きあたった。人間的欲求としての自由を考えるとき、「家」の圧力がひしひしと痛感されたその苦しみが、自然主義文学の闘うべきテーマであり、あるいはそれ以前の、鉄幹・晶子を軸とする新詩社の活動もその自由への憧れから生まれ出たものであった。どの程度に彼らが、家をとおしてその自由掣肘の本家が日本の国家イデオロギーだったかに気がついていたか否かは知らぬが、ともかく国家権力の方からは、彼らを危険思想と見て、あれこれの弾圧を加えたことは事実であり、それが明治の家と個人の対立の歴史である。

次の大正は、いわゆるデモクラシーの時代であった。これはもともと政治についての主張であるが、その底には、より自由へ、という要求がつよく潜んでいた。この言葉を民主主義と反訳せず、民本主義と反訳したことによって天皇親政の明治憲法との正面衝突を避けようとしたところに、そのことが十分察知できる。しかしそのような対し方で動揺するような相手でなかったことは、常識的な普通選挙制度すら容易に認められなかったことでもよく解るところ、もし少しでも自由を与えたならば、より自由を、さらに自由を、という民衆の要求の強まりを抑え切れないと権力者が見たからである。

しかしさすがに、民衆は自由の欲求を忘れようとはしなかった。まず労働運動、それから社会主義の拡大と普及、そして人間らしい自由の要求の高まりとして、デモクラシーの大正を特長づけるものとなった。第一次世界戦争、ロシア革命、米騒動、関東大震災などの巨大な出来ごとによって、自由と反動の波が渦巻いたが、「男と女のひらかるべき関係」というテーマからこの時代のことも、われわれに反省と回想を強いるものがある。

政治的な自由の要求が民衆から支配者に向けられた大正に於て、男女の関係にもまた、より開かるべしという要望が現われたのは当然なことである。政治、経済、文化、生活のそれぞれの場において、明治の締めつけに対する解放の要求が芽生えたのが、短い大正年間であり、あれこれの運動の中に、女性解放の要求も熾烈であった。だが女性解放の要求の中には、階級的問題と家の問題と性の問題とが一挙に持ち込まれていた。解放の要求は民衆の自覚による必然のものだったが、抑制の緩急を

のみ政治の要締と心得ていた支配者は、これらの要求に対処するにすべて弾圧・抑圧を以って臨み、法律と道徳と家のしきたり、という巨大な伝統的な圧力を敢えてした。大正における自由の欲求の熾烈なるものの一つ、恋愛と性の自由を考えてみることによってこの間の事情はすぐ飲みこめる。ここには労働運動や社会主義の普選権の獲得や反権力、反軍の運動と並ぶ大正の女性解放と性の自由の欲求が打上げられたのであった。その社会的現象として、大正にはいくつかの恋愛事件といわれたものや心中などというものがなしい出来ごとが、大きな話題となった。有島武郎のこと、野村隅畔のこと、あるいは千葉心中とか、宮崎竜介と歌人白蓮のうわさや大杉栄らによる所謂多角恋愛や、そんな私ごとが社会の話題となるという事実とともに、そういうことが（つまり私事で終っていいことが）抑圧されるべきものとしてのみ対象化されたのである。

ということには、あらゆる未解放な問題が、女性問題の上に集約するという性格があり、殊に日本の遅れた近代化の社会情勢の中での女性の立場には、身近で強固に反動的な「家」という問題がかぶさっていた。簡略に表現すると、女性の解放という問題は階級のたたかいと男性との対立という、常に二面性を備えている。

私がここにテーマとして持ち出した「男と女の開かれた関係」という問題に到達する前に、わが日本では、女性が特に苦しい社会的立場に在るのだ、という認識が先ず以って在らねばならないのである。

一九四五年（昭和二十年）八月の敗戦によって、わが国は一応デモクラシーを国家運営の建前とする、ということになり、昭和のはじめにようやく実施された普選法をもう一つ越して、女にも男と同じに政治参加が認められたが、形式的には兎も角、女たちはその参政権すら十分にわがものとしてはいないように見受けられる。というのは、女には、家を守る、という役目が歴史的に、社会的に当然とされており、その殻が殆んどまだ破られずに居るから、参政といってもその実がまったくあがらないのである。またしても「家」である。「家」が女を捉えている、ということは、「家」の組織の如何を考えずしては、男と女の関係が開かれる、ということを考えるまでにも至らないのだ、ともいえることである。

しかし女の家からの解放、という問題は、男もそうだし、女自身もそうだし、むしろ一般的な気風としては、「開かれた」などとはとんでもない、閉された中に安住したい思いの方が、彼女らには、はるかに強いとさえ見受けられる。

それは、いわば「家」のとりこになった、というものである。もしここで「家」とは何か、ということを考えるならば、これの理解如何は、近代社会とそれ以前の社会とが、われわれにとって、どちらが、どういうかかわりをもつか、という問題にそのまま置きかえられるだろう。

われわれは今すぐ家から解放されるとはどういうことか、解放されたらどうなるか、という問題も極めて不十分にしか予想し得てはいない。だが唯一ついえることは、「家」がわれわれの生活、あるいは人間の独立を捉えてはなさぬ強力な絆であり、そのことはわが日本において、殊にいちじるしく見える、ということである。

日本人の生活はすべて家を規準として成立し、また家をとおして国家からの締めつけの下に置かれている、ということは私の「家」について

の理解であり、だから、如何なる面からでも人間の解放という問題を考えるとき、必ずつき当るのは家の存在であり、家の絆である。「家」が壊れるとなれば、それほど大きな社会変動は他にないであろう。何故ならそれは日本社会を動顛させることだからである。

家を通して日本の労働者階級は、資本主義につながれている。社会的道徳も個人的な道徳の家に集約されて、そして一般的なものとなっている。性の道徳もまた然りである。夫婦も、親子の関係も、それらにおける道徳的規準もすべて「家」のために如何にあるべきか、というところから発している。「人間」でなく「家」が如何に守られるべきかが根本である。ここでは、社会的道徳さえも「家」のエゴイズムにとって代わられ、「家」のエゴイズムが道徳の規準として、社会的に認められるに至る。そして「家」とは、上につながって「国家」となるから、現代に至る民衆支配の歴史の中での「家」の存在は益々巨大で息の長い存在となる。家の組織のもっとも特長的なことは、家に一人の長がいて、すべての家族とその下人たちを完全に支配するというところにあり、それが世襲であるということによって、永久的に「家」が守られるという思想を支えていることである。かくて国家との不可分は、天皇と臣民という君主と奴隷との関係を永久的に確固たらしめたところに根ざしているのである。

男と女との開かれた関係、ということは、またこの「家」に反抗するから、家をとおして民衆に君臨している国家への反抗に直面する。男と女との関係の解放は、ただに一組の人間の自由ということではなく、社会の根底にかかわることとなる。それだけに弱い民衆がこの掟に触れる

イスラエル政府によるアラブ住民の土地没収の中止を呼びかける署名のお願い

イスラエルは一九四八年の建国以来、パレスチナ・アラブの土地を次々に没収し、アラブ土地防衛委員会の発表によりますと、一九四八年にアラブ人が持っていた土地四〇万ヘクタールのうち、すでに三二万ヘクタールが没収されました。・・・・

こうしてイスラエルのアラブ住民五〇万は、今年の三月三〇日を「土地の日」とし、ゼネストに入りました。すでにイスラエル産業にとってアラブ人労働者は欠くことのできない存在となっているため、あわてた当局は、軍と警察を総動員して、弾圧にかかり、ガリラヤ地方のサハニン村、アラベ村、ディール・ハンナ村の三カ村を中心に六名が射殺され、数百名が逮捕されました。このあと、イスラエル中のアラブ村落のストは大規模な大衆デモを行ない、軍と警察を村々から追放しました。・・・・

今、イスラエルによる土地没収に抗議する多くの人々の署名を当局に送り厳重に抗議するとともに、今までその存在を無視されてきたイスラエル内アラブの新しい闘争を支援し、彼らが報道管制の中で再び闇から闇へと葬り去られてしまわないように、監視を続けたいと思います。署名に御協力お願いします。

連絡先　東京都小金井市貫井北町二丁一三三　広河気付西田博宛

時は、死を約束する以外に最後まで志を貫くことは思いもよらなかったのである。だから、家を捨て、社会に叛くことを個人の思念のままに命をかけてどうくりかえしたってそんなことは「開かれた関係」とははなはだ遠いものでしかない。わが情熱に自己をかける真摯な魂がどうじたばたしたって、封建制の時代から明治の文明開化を経て、大正のデモクラシーを経験したところで、生きる人間が開かれた関係で男と女の在り方をわがものとすることは、まず絶対に出来ない、出来るはずがないのである。

自由の前に立塞がる「家」、開かれた関係を欲する男と女の前に厚い壁をなす「家」、われわれはこのことをふかく認識することなしに、いいかえれば、そこにあるたたかいの存在することを知るのでなければ、開かれた関係を考えることはできない。近松の物語にもいくつかのかなしくうつくしい心中物語があり、われわれの知る大正昭和にも、それに類する悲恋物語はあったが、それらは開かれた関係ではなく、敗北のみじめさでのみある。という見解に立って、未開の時期に起ったいくつかの「男と女の開かれた関係」を考えてみる必要があるかもしれない。

（一九七六・一一・二〇）

× × ×

アナキズムとエスペラント　向井　孝著

山鹿泰治　人とその生涯　六〇〇円

草創期のエスペラント運動、そして大杉栄との出合いを通じて日本のアナキズム運動にユニークな足跡を残した山鹿泰治の初の評伝。大杉を助けて・中国のアナキズム運動・日本アナキスト連盟と共に他。

東京都板橋区赤塚2—35—9　白樺ハウス10号

青蛾房

（取扱い書）

高群逸枝　評論シリーズ　女性史研究会編集・発行

婦人戦線に立つ　I（品切れ）二五〇円

婦人戦線に立つ　II　三〇〇円

婦人運動の実践題目　三二〇円

婦人運動の単一体系　三二〇円

大正末から昭和初期にかけて、アナ・ボル論争の渦中で執筆された〝アナキズム〟〝女〟〝恋愛〟そして婦人運動論など、高群逸枝に欠くことのできない初期評論集の集大成。

小川正夫評論集

性とアナキズム　六〇〇円

同書刊行会編集・発行